

## 大齋節前主日 受難の主を見つめること

今週の水曜日から、大齋節に入ります。

私たちは昨年末のクリスマスを起点にして、イエス様の誕生からの生涯をたどりながら福音書に従って学んでまいりました。しかし、今日からは、クリスマスではなく、もう一つのお祝い日である、イースターを起点にした暦に従い、イエス様の受難と復活を意識しながら、学んでゆくことになります。

大齋節と、私たち聖公会は呼んでいますが、カトリックやルーテル教会などは、四旬節と呼ぶのが一般的になってきました。四旬とは、40日という意味です。1ヶ月を3つに分けた時、上旬、中旬、下旬と呼んでいるのは、最初の10日間、真ん中の10日間、最後の10日間ということですね。今年の大齋節は、3月1日・水曜日から、4月15日・土曜日。イースターの前日まで、数えると46日あります。しかし、日曜日は、イエス様の復活されたお祝いですから、それは数えないで、40日あるわけです。つまり、大齋節は日曜日より、その間の週日、普通の日を守ることが大切のように思います。

(2週間前、朝夕の礼拝が大切だと言ったのも、ちょっと関係があるかもしれません。)

この期間は、イエス様が伝道活動に入られる前、40日間荒野で修行をされたことと、活動の最後、エルサレムにロバに乗って入られてから、十字架にかけられ、復活されるという1週間の出来事を黙想するために用いられています。昔は、イエス様の復活に合わせて、洗礼を受ける人の洗礼準備期間ということになっていましたが、それを教会員みんなが毎年体験しようということになって、定着して行きました。

でも、苦しい修行というのは、特に食べ物など、ガマンすることが多いので、皆さんよくご存知のように、その前に大騒ぎをして楽しもう、と今年も昨日あたりから、南米などカトリックの強い国では、カーニバルをしています。日本語では、「謝肉祭」。肉に感謝する祭りが行われて、そのあとは、ひっそりとイースターまで過ごすわけです。

さて、今日の福音書は、イエス様がエルサレムへ最後の旅をされる前、山に登られたら、イエス様の姿が変わって、その両脇に、旧約聖書を代表するモーセとエリヤが現れて、話し合っていた、という、変容の出来事が、毎年選ばれています。本来、教会はこの出来事を8月6日という、夏に記念するのですが、一年の全く反対の時期に、わざわざ礼拝で読むのには、理由があります。

今日の特祷にも、それが表れていると思われます。「神よ、あなたはそのひとり子の受難の前に、聖なる山の上でみ子の栄光を現されました。」とあります。神様は、イエス様がこれから迎えられる受難という、できたら避けて通りたい、恐ろしい出来事を引き受けるように、イエス様を励ます必要を感じられたのだらうと思います。

イエス様は、神様の御心を聞くために、つまり祈るために、しばしば山に登られましたが、ご自分にどんなことが起こるのか、不安な気持ちだったのではないのでしょうか。今日の福音書は、マタイ17章の1節から9節ですが、その直前、16章の終わりに「イエス、死と復活を予告する」という題があり、このあと、悪霊にとりつかれた子を癒した後も、「再び自分の死と復活を予告」しておられます。

このマタイによる福音書には出てきませんが、ルカによる福音書では、死と復活の予告をしたあとで、少しあとの、9章51節では、「イエスは、天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向かう決意を固められた。」と書かれています。

ご自分がエルサレムで人々の罪のために、身代わりに十字架の苦難を受けることを予感しつつも、なかなか決断できない時、神様が力を与えられたのが、この主イエスの変容という出来事だったのだらうと思います。

イエス様は、ご自分の死と復活について、大変な悩みがあったのですが、神様は、イエス様がモーセやエリヤと共に、栄光に包まれているという素晴らしい幻を示して、イエス様の選んで歩いておられる苦難を受ける道が正しいことを、その幻で励ましておられたのだらうと思うのです。

さて、それでは、イエス様にならって、40日の大齋節を守る私たちは、何をしたらいいのでしょうか。

単純に厳しい修行に励めばいい、というものではありません。今日の使徒書を書いたパウロは、自分が今までに努力してきた信仰的な修行は意味がない、と言うのです。

今日の使徒書の冒頭で彼は、「しかし、わたしにとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです。そればかりか、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに今では他の一切を損失とみています。」と語っています。彼は何を損失と言っているのでしょうか。

パウロは、今日の使徒書の直前で

『3:5 わたしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員、 3:6 熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころのない者でした。』

このように自己紹介して、自分のユダヤ教徒としての正当性や熱心さをあげています。でもその後で、

『 3:7 しかし、わたしにとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです。』と語っているのです。

律法の教えやユダヤ教の習慣など熱心に修行することより、イエス様を知ることの方が、くらべものにならないくらい、素晴らしい体験だ、と言うわけです。

パウロは、イエス様が弟子たちと伝道しておられた姿は知りません。彼は、クリスチャンである弟子たちを迫害する立場の人でしたが、使徒言行録によると、パウロはダマスコのクリスチャンを迫害するために意気揚々と旅をしている時、劇的にイエス様に出会って回心した、と書かれています。イエス様の何を知ったのでしょうか？

私は昨年末、12月20日に発行されたばかりの、西南学院大学の青野太潮先生が岩波新書から出した、「パウロ 十字架の使徒」という本を手に入れました。しかし、読んだのは台湾から帰って、2週間くらい過ぎてからでした。青野先生は、「十字架の神学」ということを主張しておられる学者で、強いイエス様ではなく、弱い、十字架の上で野垂れ死にした、みじめなイエス様の姿の中に、救い主の力を感じるのだ。パウロはそれを言いたかったに違いない、と主張されます。そして、使徒言行録のパウロの回心は、実際のパウロの体験とは違う。彼は復活した勇ましいイエス様と出会ったんじゃない、と主張されるのです。

青野先生が、パウロの強調するイエス様との体験は、コリントの信徒への手紙に出てくる、と言います。引用される有名な箇所は、コリントの信徒への手紙一2章1~2節です。

『兄弟たち、わたしもそちらに行ったとき、神の秘められた計画を宣べ伝えるのに優れた言葉や知恵を用いませんでした。なぜなら、わたしはあなたがたの間で、イエス・キリスト、それも十字架につけられたキリスト以外、何も知るまいと心に決めていたからです。』

青野先生によれば、パウロは奇跡を行うイエス様でもなければ、復活して力強いイエス様でもない。「十字架につけられたままのキリスト」が人々に救いを示しているんだ、と言うのです。

その意味を先生が説明しておられる箇所を引用します。

『パウロが「十字架につけられたままのキリスト」という言葉で伝えようとしていることは、十字架の上で無残な姿をさらけ続けるイエスから目をそむけず、その無残な姿を深く心にとどめよ、ということであろう。なぜならば、神はそういう無残な姿をさらすイエスをこそ肯定しているのだと、パウロは捉えているからである。パウロの心の内において現れたのは、みじめで無残な姿になりながらも、復活のいのちを与えられ、十字架につけられたまま今もなお生き続けるイエスであった。「復活者」イエスは、まさに「十字架につけられたままのキリスト」であったのである。パウロが受けた啓示の内実は、そのようなイエス・キリストとの出会いの体験であった。』(同書124ページ)

どうでしょうか。イメージはわかりますか？

私は、青野先生の本を読みながら、もう13年も前に作られた映画を思い出しました。イエス様が十字架に架けられるまでの、最後の12時間を描いた「パッション」という映画です。ここで言うパッションとは、「受難」という意味です。イエス様が受けられた苦しみを表現した言葉です。あの、苦しそうな姿のイエス様からは目をそらしたくなるのですが、そんな場面を見続けている時、私に起こった感情は、この苦しんでいるイエス様なら、私の苦しみも理解してくださるはずだ、という気持ちでした。

今日の使徒書を書いたパウロは、二つの勢力と戦わなければならなかった、とされています。一つは、ユダヤ教から抜け出せず、律法に囚われている厳しいクリスチャンたち。もう一つは、自分たちは救われているのだから、もう何をやっても許される、と倫理道徳的に墮落したクリスチャンたち。これらは両極端のように見えますが、実は自分たちの姿勢を変えず、強い態度で生きているクリスチャンたちです。しかしパウロは、人々の苦難を共に背負い、十字架につけられ続けるキリストが大切と言います。

それで、最後に申し上げたい。私たち聖公会は「大齋節」と言い、カトリックやルーテル教会は、この季節を「四旬節」と呼んでいるのですが、私は今年は、日本基督教団のこの季節の呼び方、「受難節」という言い方に、ちょっと引かれています。私たちが自分を苦しめるのではなく、私たちの苦しみ悩みを一緒に共感してくださる、イエス様のことを思い、そこに注目したいと思うのです。

大齋節第1は、悪魔に三つの誘惑を受けられたイエス様。大齋節第2は、ユダヤ人の議員でファリサイ派のニコデモとの問答をするイエス様。大齋節第3は、サマリヤの井戸で出会った女性と話すイエス様。大齋節第4は、生まれつき目の見えない人を癒すイエス様。大齋節第5は、兄弟が亡くなったのを嘆いているベタニアのマルタとマリアの姉妹とかかわるイエス様。そして復活前主日は、十字架の上で苦しむイエス様を福音書で読みます。それらの物語から、私たちは今年、人々の苦しみに寄り添うイエス様、受難のイエス様に目を向けたい。

パウロが「わたしはあなたがたの間で、イエス・キリスト、それも十字架につけられたキリスト以外、何も知るまいと心に決めていた」と言ったことに、もう一度注目して、この季節を過ごしたいと思います。